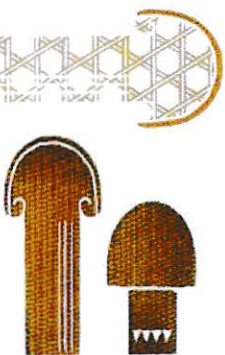
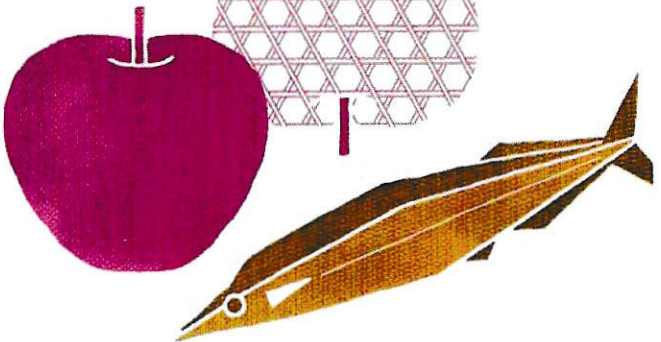


秋彼岸

西念寺



秋彼岸の意味

「暑さ寒さも彼岸まで」と言う通り、朝夕に涼しさが

感じられるようになったこの季節、秋のお彼岸を迎えます。

秋のお彼岸は、秋分の日をお中日ちゅうちゅうじち（中心の日）とする一週間を指しますが、

そもそも「彼岸」とは、彼の岸かと書くように、

わたしたちの住む世界しがん（此岸）と相対する極楽浄土を意味します。

『観無量寿経』には、「日想観にっそうかん」といって、夕陽を見つめ、

その先にある極楽浄土を思い浮かべるといふ仏道修行が説かれます。

その修行に最も適しているのが、太陽が真西に沈む

秋分・春分の日であることから、この時期に

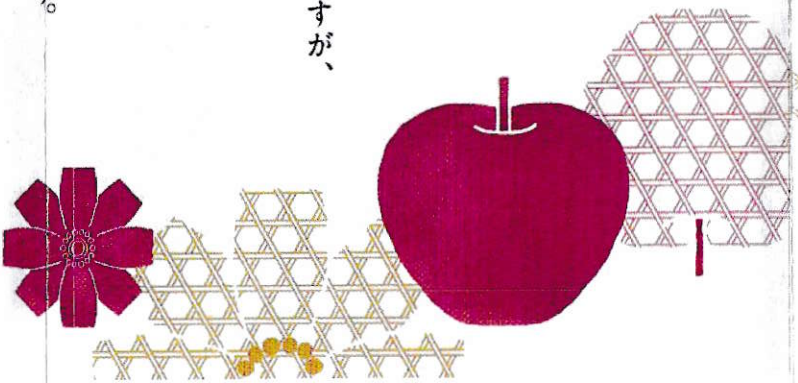
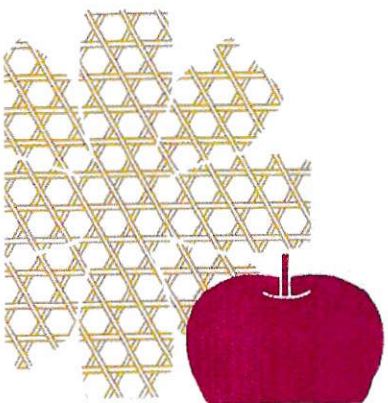
ご先祖さまや先立った方々を供養する行事として定着したのです。

残暑のなかにも虫の声が聞こえはじめるこの季節。

この秋のお彼岸には、今日ある自分を育んでくれた

今は亡き方々へのご回向えこうのためにも、

まごころのお念仏をおとなえしましょう。



み仏の光

私は法然上人のみ教えについて学ぶなかで、一つ疑問に思うことがありました。「逆修説法」という、法然上人の説法録の中に「阿弥陀さまは様々なお力をお持ちだが、それらを目で見ることは叶わない。ただ光明だけは見ることが出来る。だから光明は勝れたお力だと言える」と記されています。「光明を見ることが出来る」とは具体的に何を意味するのかということ、いろいろと思案していました。

その頃、私は知恩院にて浄土宗僧侶としての修行を確かなものとする「聖書伝授道場」という修行の道場に入りました。道場の期間中は毎日、暗幕で締め切った薄暗いお堂でおつとめをします。初日、お堂に導かれ入ると、正面の金色の阿弥陀さまのお像が、お灯明(蠟燭)のゆらゆらと揺れる光に照らされ、闇の中にぼんやりと輝き出ておられるではありませんか。

暗闇の中では、お灯明の揺れる光や仏さまのお姿が、趣深く受け止められます。日頃、自坊でおつとめをする時には昼夜問わず電灯をつけていたため、私はそのことを忘れていました。思い返せば法然上人は、お像の仏さまも、我々のために現れ出てくださいました「化身(分身)」の仏さまだとおっしゃっていますし、冒頭の説法がなされた際には、阿弥陀さまのお像の前に四十八本のお灯明が立てられたとも伝えられています。ご本尊さまの輝くお姿を拝することが「光明を見る」ということなのではないかと、その時感じました。

「愚者の自覚」のもと、素朴で明快な信仰にあえて立ち返るところに上人のみ教えの妙味があると考えていたにもかかわらず、頭の中だけで「光明」をこむずかしく考えていた私は、知らないうちに「智者のふるまい」に陥っていたのだと、反省させられました。

お彼岸の時期はちょうど西へと日が沈むため、阿弥陀さまや極楽浄土に思いを馳せるのに最適とされます。そして、秋のお彼岸が過ぎると次第に日が短くなっていきます。

時にはみなさまも、夕刻の薄闇の中、お灯明の光に輝くご本尊さまにゆっくり向き合ってみてください。

